

CULTURE

カルチャー

● インドネシアの泥炭火災

総合地球環境学研究所研究員 塩寺さとみ



インドネシアで起きている泥炭火災。一度火災が起きますと長期化し、二酸化炭素排出による温暖化や人々の健康への影響などが懸念されている(2014年2月5日)

インドネシアの泥炭地は、熱帯域では世界最大の面積を誇るといわれています。しかし、泥炭は水はけが悪く栄養に乏しいために農地などには適さず、長い間、自然状態の泥炭湿地林が維持されてきました。

ところが、1900年代から始まった大規模農地開発とテカシア(紙パルプの原料)やアラヤシ(植物油であるパーム油の原料)の大規模プランテーションの開発のため、泥炭湿地林にたくさんの排水路が建設されました。現地を訪れると、幅10センチ以上の排水路が水を流れていく



ウイスキーをお好きな方なら、ピート(泥炭)という言葉を目にされたことがあるのではないのでしょうか。泥炭とは地面に落ちた植物が分解されず長い間に積み重なってできた土のようなもので、乾燥させると炭のように燃やすことができます。

この泥炭で麦芽を燻すと特有のストモキーな香りが生まれるため、モルトウイスキーの醸造時に用いられています。泥炭は隠れたところで私達の生活を豊かにしてくれています。

泥炭は日本では温帯や湿地に見られ、京都市内では深泥池湿地(京都市北区上賀茂)や八丁平温帯(同左京区久多)が有名です。そこにはミズゴケなどのほか、モウセンゴケやミミカキグサなどの食虫植物が生育しています。一方、赤道直下の熱帯域では、泥炭地樹高が30〜40ほどの泥炭湿地林という森林が発達しており、そこに固有の植物が見られるほか、オランウータンのすみかとしても知られています。泥炭は多様な生物を育んでいるのです。

そんな泥炭地の変化が今、地球規模で大きな問題となっています。インドネシアの泥炭地で、大規模な火災が起きているのです。

このことが原因で泥炭地が乾燥し、泥炭火災が起きて大気中に大量の二酸化炭素(CO₂)が排出され、地球温暖化への影響が懸念されています。泥炭は植物でできており、地中まで石炭のように燃えるため、野焼きなどが原因で火災が起ると簡単に消せないのです。

乾期が長引いた2015年には、近畿地方の面積の約80%にも相当する2万6000平方キロもの広範囲な場所で大規模な火災が発生し、日本の年間排出量を超える約16億3600万トンのCO₂が放出されました。また、火災の煙の影響で50万人がどの痛みなどを訴え、空港や小学校が閉鎖されるなど人々の生活や健康にも大きな影響が及んでいます。私もインドネシアに滞在していた折には何度か泥炭火災に遭遇し、体調を崩してしまつたことがあります。この煙は近隣のシンガポール、マレーシア、タイなどでも煙害を起こし、国際問題にまで発展しています。

そして、日本に住む私たちが日々の生活のなかで使用している紙の原

木を見ることがあります。簡単に消せず

農地開発原因、大量のCO₂放出

インドネシアの泥炭地問題は、これまで足を踏み入れて来なかった未知の場所まで開発の手が及んだことが一つの原因であるといえます。けれども、泥炭地に限らず、人はこれまで大地を切り開き、目的に沿うように作り替え、その上に営みを築いてきました。泥炭地で起きている問題は、これまでの人と大地との関係性に問いを投げかけているのではないのでしょうか。私にはもう一度、足元を見つめ直す必要があるように思えてならないのです。

――第2水曜に掲載します

いかに水が、水で満たされているから、この森林が成り立っているのです。このバランスは、泥炭地に水路を作っただけで森林全体の環境が崩れてしまつていられるほど繊細なものなのです。

人と大地の関係問う



インドネシアの泥炭地林に建設された排水路と、農地に広がるアカシアのプランテーション。土のような泥炭と未分解の樹木が乾燥しているのがみられる。(2014年6月5日)

料や、化粧品やお菓子などに使われているパーム油もここから運ばれてきているのです。遠い東南アジアでの出来事ですが、私たちの生活とも密接につながっているといえます。

私は、泥炭湿地林の植物の多様性と、これに対する泥炭火災などの影響を、そして、その後の回復過程をテーマに研究を行っています。また私たちのプロジェクトでは、インドネシア泥炭回復庁のような現地の行政機関やNGO、そして住民の方々と協力しながら、排水路へのダムの建設による泥炭地の再湿地化や在来種の植林を通して、その地域に適した形で泥炭地を利用していく方法についての実践的研究も行っています。

泥炭湿地林には「水に浮かぶ森」という呼び名があります。雨期になると地面が水で覆われるだけではなく、スポンジ状の泥炭の中に一年中大量の水を蓄えているからです。言

しおでら・さとみ 山形大学農学。北海道、京都大の研究員を経て、2018年より現職。京大東南アジア地域研究研究所選擧助教授。専攻は植物生態学、地球環境科学。